

京都方言の形態・文法・音韻(2)

—会話録音を資料として(2)—

中井 幸比古

要旨

本誌第1号の続編として、京都方言の会話資料に基づき、以下の諸点を論じた。

- 2. 3 2 ソ系指示詞における、語頭のソ→ホへの変化について
- 2. 3 3 丁寧の助動詞マスの、マシタ・マシテのアクセント
- 2. 3 4 尊敬の助動詞ハルの、ハッタ・ハッテのアクセント
- 2. 3 5 原因・理由表現について(ノデ類・サカイ類・シ)
- 2. 3 6 限定の助詞シカ相当の語

以上の各項目の要旨は以下のようである。

2. 3 2 ソ系指示詞における、語頭のソ→ホへの変化について

2. 3 2. 1 考察の範囲

京都方言(旧市内の方言)においては、指示詞一般の用法としては、ソ→ホへの変化はごく少ない。変化例の大部分はソ系指示詞を含む接続詞・接続詞的用法に属する。

2. 3 2. 2 ソ系指示詞を含む接続詞・接続詞的用法

接続詞・接続詞的用法で、ホが優勢な語は、概して慣用度が高く、語形変化が著しいものが目立つ。例えば、「そしたら」のホ系の変化形には、ホシタラ・ホイタラ・ホイター・ホタラ・ホタなどがあるが、変化の少ないホシタラにはソシタラというソの例もかなりあるのに対して、変化の大きなホイタラ以下には、×ソイタラなどソの例はない。また、共通語的なもの(ソレジャなど)にはホの例はない。

2. 3 2. 3 ソ系指示詞の、接続詞以外の用法

接続詞以外の用法はホの例は少ないが、(1)ソのほうが圧倒的に優勢ながらホも見られるものと、(2)ソしか見られないものがある。(1)の例:ホー(そう)、ホノ(その)、ホレ(それ)、ホンナ(そんな。但し無声鼻音を含むン*ナは多い)。(2)の例:ソイツ、ソースなど(そうで・どす)、同意のソー、ソーユー、ソコ、ソッチ、ソチラサン、ソナイ・ソナイニ(但しン*ナイは多い)。

2. 3 3 丁寧の助動詞マスの、マシタ・マシテのアクセント

丁寧の助動詞マスのタ・テ形のアクセントは、高起式では全員、'マシタ・'マシテ(例:「イギ'マシタ 行)が非常に優勢。低起式は話者によりまちまちで、高起式同様に'マシタ・'マシテ(例:タ「ベ'マシタ 食)でほとんど統一されている人もあれば、マシタ・マシテ(例:タベ「マシタ 食)がはるかに優勢で、式によってほとんど相補分布に近い人もある。

近畿周辺部の方言のアクセントや大阪では、式と無関係に、ほぼマシタ・マシテで統一されている。京都の形は、これから核の位置が左にずれてきたと思われる、左ずれ(昇核現象)は高起式に起こりやすいので、式によって核の位置が異なるタイプが生まれたと考えられる。但し、最近は共通語化によって、式と無関係にマシタ・マシテを使う話者が増えている可能性もある。

また、核の位置も或る程度関係している。マシタ・マシテの前が1拍の動詞(2拍1段動詞・カ変・サ変)はす

べて、○マシタ・○マシテで統一。

2.34 尊敬の助動詞ハルの、ハッタ・ハッテのアクセント

マシタ・マシテの場合と異なり、①ハッタ・ハッテで統一されている話者が非常に多い。②「高起式ハッタ・ハッテ優勢、低起式ハッタ・ハッテ優勢」の話者は、ごく少数に限られる。

一方、マシタ・マシテの場合と同様、1拍の動詞（2拍1段動詞・カ変・サ変）はすべて高起式だが、すべて○ハッタ・○ハッテ、○ヤハッタ・○ヤハッテ。

助動詞ハルは成立が新しく、分布域が狭い。大阪落語.txt ではほぼハッタ・ハッテなのだが、京都の場合、ハルが普及したとき、すでに昇核現象がおこっていた可能性が高く、史の変遷過程は不明確。

2.35 原因・理由表現について

原因・理由表現について、前稿で見落としていた船木(2007)との異同について述べる。異同の多くは、話者の世代差に起因するものである。

2.35.1 原因・理由表現の「ので」類の語形と接続について

①船木論文は、ノデは共通語的で、鼻音の後の除き、ンデを使うとする。しかし、kyodanwa では、ンデはほぼ動詞・形容詞の過去形にのみ付く。非過去形や否定形には、ほぼノデしかつかない。この条件は「のだ」相当の、ノヤ・ンヤの使い分けに準ずる。ノデは、鼻音の後以外でも、非過去形や否定形には付く。

②ンデは、体言・形容動詞接続+ヤ（普通体の断定助動詞）に付く用例はkyodanwa で僅少だが、船木報告同様ナンデの形で少数現れる。丁寧体のドスノデ・ドン*ノデ・(ドシタンデ)が多い。ナンデは、共通語化と、下の世代でノデ類が普通体にも多少進出するようになって、使用が増加したのだろう。

③船木論文は、準体のノンはあるが、理由のノンデは存在しないとする。しかしkyodanwa では準体のノン同様、理由のノンデも存在する。但し、準体の場合もノが普通でノンは非常に劣勢だった（前稿）のと同様に、ノデのほうがずっと優勢である。

2.35.2 原因・理由表現「さかい」類について

サカイ類については、船木論文よりも、理由を表す接続助詞の中で、サカイ・サカイニ（本稿ではハカイ・ハカイニなどの語形を含め、ニの有無にのみ着目する）の使用範囲が広い。但し、以下の5点のうち、②～④はkyodanwa の例を欠くので数名の話者の内省にのみ基づく。実証が必要。

①ヤロ(一)サカイ(ニ)の存在を、船木論文はほぼ否定するが、kyodanwa には現れる。話者内省も同様。船木報告は、サカイの衰退の過程で用法を狭めつつある、その一段階の報告。同論文が言う、「元来あった名詞性を残している」のではないだろう。

②述語用法のモダリティ形式との共起制限（船木論文4.4節）はかなり微妙。ンデ・ノデが共通語のそれと同じような制限を持つことは予想どおりである。しかし、(a)サカイ・*サカイニ+トチガウカ、(b)*サカイ・サカイニ+質問カで、*が付けられた形式をOKとする話者もある。

③「サカイニ+終助詞ナ」を船木論文は否定する（但し「サカイニ+間投助詞ナ・ナー」はOK）。しかしこれも言えるとする話者がある。

この場合のアクセントは、高接平坦が普通の話者[クル「サカイニ「ナ(一)」]と、高接下降を使うとする話者がある[「サカイ「ナー」、「サカイ「ナ」、「サカイニ「ナー」、「サカイニ「ナ」」]。

④何の問題もなく前件と後件のつながりが受け入れられるような場合には、船木論文はサカイニが不適當だとするが、サカイ・サカイニともに可能とする話者がある。

サカイ・サカイニの、サ以外の拍が卓立する例はkyodanwa では「サカイ「ニ」が大多数をしめる。船木報告の「サカイ「イ」ニは少数。サカイニのほうがサカイより強制的に使われる場合が多いようだが、そうでない場合も使用可能。

kyodanwa では、サカイとサカイニを比べるとサカイのほうが頻度が高かった（前稿）。③④は、やや劣勢だっ

たサカイニが、下のある世代で一層用法を狭めつつあることを示すものかもしれない。(さらに下の世代ではサカイもサカイニともに衰滅)。

⑤船木論文などが報告する、接続詞セヤサカイは、ソヤをセヤという、下の世代の一部の人が使う語形である。kyodanwa には現れない。ソヤシのソが取れたヤシ・ヤシーは kyodanwa には全く現れない。共通語の接続詞ダカラからの翻訳による新形。

2. 35. 3 原因・理由表現「し」について

①前稿、検索条件のミスがあり、シは前稿より一層多くの用例が現れる。特に論旨を改める必要はない。

②前稿 2.23 節の「大阪方言で報告される、終助詞化したシ」は、船木論文の 5.3.2 のうち、共通語のカラにない、「聞き手の認識のありかたに働きかける用法」をさす。例：[わかっていることを説明されて]そんなこと知ってるし。該当例は kyodanwa にはない。数名の上の世代の話者の内省・調査でもまったく使わない。しかし、船木論文と同じ、下の世代の話者は使う。従って、終助詞シは、少なくとも京都では非常に新しい用法である。

この新しい用法の終助詞シは、この「音調が低接平坦・長音化しない・男女とも使う」の3特徴をもつ。一方、幕末から明治前半生の落語家による大阪落語.txt には、「音調が低接音節内上昇・長音化する・女性語」という特徴をもった終助詞シが見られる。これは前田(1949)が、京都にはなく大阪にだけあるとしたものに相当すると考えられる。実際、京都にはない。

大阪で、この終助詞が変質して上記の新しい終助詞ができ、さらにそれが最近京都でも借用されて広まったのではないか。大阪弁内部で起こったシの変質は、共通語のテヨ・ダワの衰退に見られるように、女性専用終助詞が嫌われたためかもしれない。上昇調も女性語を連想させる。

さらに、大阪落語.txt には、シナーの形が現れる。「ほんまに暑いしなあ」。これは、「ほんまに暑いなあ」と類義。なお、京都でもアツイナーと類義のアツイエナーがあった。シ・エが実質的意味を失っているが、ともに女性語であることを示す。両者は併行する語形で、興味深い。

なお、通常の、原因理由(共通語のカラにもある、後件が省略された形も含む—後で電話するし[待っていて]—)・並列の用法のシの用例数は大阪落語.txt には非常に少ない。

③前稿で、「シは、幅広い話者に現れる。意味用法は共通語のシの用法とあまり変わらないよう」としたが、共通語のシとの用法の相違について、船木論文は細かく指摘して有益。但し、上記②の終助詞用法については、上記のように京都方言にはなかったわけで、共通語との用法の違いは船木論文よりは小さくなる。また、以下2点(3a)(3b)については、船木論文と今回の内省・調査結果が異なる：

(3a)船木論文は、シの「後件に感動や詠嘆が来にくい」とする。?雪も降ってきたし、やっとかさ冬らしーなってきたな—(詠嘆)。この文はたしかに落ち着きが悪いが、二つ以上の節を並列すれば、可能になる。○木の葉も落ちたし、雪も降ってきたし、やっとかさ冬らしーなってきたな—(詠嘆)

(3b)船木論文は、丁寧体では理由が一つしかない場合シは不可とする(非丁寧体では可)が、今回の話者の内省では、丁寧体・非丁寧体ともに可能。○「すぐに戻ってきますし、ちょっと待っててください。」

2. 36 限定の助詞シカ相当の語

宮地(2007)によれば、限定のシカ相当の係助詞(副助詞)の変遷は：近世前半の上方語でホカ・ヨリホカ。近世後半は資料が乏しく不明確。近世末か明治頃に、ヨリがシカ相当の係助詞となる。ホカは現代の『大阪ことば辞典』に見えるところをみると、文献にはあまり現れないが、近世前半以降、使われ続けていたのだろう、とされる。

大阪落語.txt(幕末から明治前半生まれの落語家録音のSPレコード)では、シカも少数現れるが、ヨリ・ホカが多く、宮地の記述によく一致する。

しかし、GAJ51「百円しかない」では、近畿地方にもシカが多く、ヨリが大阪府・兵庫県・京都府に散在し、ホカはヨリの外側の近畿周辺部や中国地方などに分布する。京都市は、ヨリの分布域の東端近くにあたる(ホカは近

くにはない)。中井(2000)でも、kyodanwa の話者でもある2名の話者に対する質問調査によって、「42 たまにしか飲まない、46 これだけしか」の「しか」はシカが普通でヨリが不可能ではないという程度、という報告をした。

kyodanwa でも、シカが多数で、ヨリが特定話者に少数、ホカは用例全くなし、という結果であった。

シカが京都の上の世代にもかなり多い理由は以下のように考える：明治以降、大阪では、或る程度ホカが使われ続けていたが、京都ではホカは廃語的で、新興のヨリも或る程度使われてはいたものの、まだ十分定着を見ていなかった。いわば空き間に近かったために、東京語・標準語（+近隣の方言？）からシカが入ってきたとき、急速にそれを受け入れたのかもしれない。